

# 「全日畜シンポジウムin北海道 スマート畜産への期待」のご紹介

北海道統括支店 業務課 河野 直和

先般、9月26日（木）～27日（金）にかけて帯広市内で畜産生産者の団体である一般社団法人全日本畜産経営者協会（通称「全日畜」）が主催する第4回シンポジウムとして「スマート畜産への期待」と題して、150名の出席で開催されましたのでご紹介させていただきます。

まずは、全日畜の金子春雄理事長より「全日畜は日本中央競馬会畜産振興事業としてスマート畜産調査普及事業を実施しており、第4回目の本シンポジウムは、北海道での開催は初めてであり、酪農畜産を基盤としている所での開催は大変意義ある事でスマート畜産への理解をより深めて欲しい」と述べられました。



全日畜の金子春雄理事長の挨拶

続いて、第一部の特別講演として「ドイツにおけるAI、IoTを活用した酪農業モデル」の演題で鹿児島大学共同獣医学部の窪田力教授がドイツで開催の酪農・畜産機械展「ユーロティア2018」の視察調査を中心に紹介されました。酪農業の自動化技術として搾乳ロボットなどの展示が多く、先端畜産経営技術体系（AI、IoT）を取り入れ生産性の高い畜産（スマート畜産）の普及を図っているとのことでした。ドイツの酪農は日本と同様に人手不足や農地面積も限られているの

で、省力化、生産性向上が課題となり、その解決としてスマート畜産は日本にはとても参考になるとのことでした。



講演の様子（鹿児島大学 窪田力教授）

第二部の特別講演は「酪農先進国デンマークのスマート畜産技術」の演題で酪農学園大学獣医学群の中田健教授がデンマークの酪農業の特徴や概要を紹介した後、スマート畜産としてデータベース活用を行い関



参加者からの質問に答える（酪農学園大学 中田健教授（右）と農研機構の中久保亮主任研究員（左））

係する企業や団体が畜産の高度化を図っている事例を紹介されました。

次に事例紹介として、まずは株式会社十勝加藤牧場の加藤賢一会長が「家族経営を支えるスマート畜産技術」の演題で発表されました。帯広市で酪農を営んで44年前に入植して現在330頭の乳牛を飼養しており、ジャージー種を約4割の130頭飼養されています。スマート畜産の取り組みは2014年稼働の新牛舎の増築で、搾乳ロボット、自動換気システム、自動制御照明システム、餌寄せロボットを導入して取り組む事で作業効率や生産性向上、体細胞減少など成果を上げた事例が紹介されました。



講演の様子（十勝加藤牧場 加藤賢一会長）

事例の2例目として、とちか村上牧場の村上智也副代表が「クラウド牛群管理サービス『ファームノート』」の演題で発表されました。自称十勝最北端の酪農家と話す村上智也副代表の牧場は十勝の上士幌町で600頭の飼養頭数、年間出荷乳量4,000トンを誇るメガファームです。クラウド型牛群管理システム『ファームノート』と発情・疾病兆候検知装置『ファームノート



講演の様子（とちか村上牧場 村上智也副代表）

・カラー』の活用でスマート畜産を図っており、導入後は牛群管理として牧場全体の把握が可能になった事や、発情牛の発見が増加し受胎率が向上した事や疾病牛の発見も増加したため牛の健康管理にも一役買っているとのこと。現在とちか村上牧場では次世代通信技術の5Gと4Kカメラで乳牛を管理する実証実験（総務省事業）が行われており、更なるスマート畜産への取り組みがなされています。

特別講演、事例紹介の後、講師の方々の質疑応答が行われました。特に十勝加藤牧場の加藤賢一会長への質問が多く、スマート畜産への取り組みとしての各機器などの導入での苦労話など聞く事が出来、会場の参加者の頷きなどが印象的でした。



講師の方々との質疑応答の様子

最後に日本の農畜産業が抱える様々な問題をどのように解決していくかの糸口となるスマート畜産への期待が今回のシンポジウムの目的であった事を改めて感じた講演、事例発表でした。



会場出入口に設置された十勝加藤牧場のジャージー牛乳の試飲ブース（濃く美味しい牛乳で大変好評でした。）